

にじのはし

瀬戸内町立西阿室小学校 五年 宮田 蒼大

今から一昔前。カケロン島は、食べる物や水、木々などがほとんどないかれ果てた島だった。ネリーという若者は、どうにかしてこの島を豊かにしたいと思ってはいたが、何をどうしたら良いのかさっぱり分からず、もやもやした日々を送っていた。

そんなある日、ネリーは夢を見た。かみの毛もひげも白いおじいさんが、持っているつえを一ふりしたら、カケロン島からのびる赤い橋ができた。そしてネリーにこう言った。

「この赤い橋は、向こう側の島へ行って帰ってくることでできる。その島には食べ物も水も何でもあるぞ。

ただし、一回きりしか渡れないぞ。」

目が覚めると、カケロン島から本当に赤い橋がのびていた。ネリーは夢の話が本当なら、向こう側の島へ渡って、豊かなくらしをしたいと思った。これ以上この島にいても、何も変わらない。今の生活を全部捨てて、向こう側の島へ行こう、と早速出発することにした。

赤い橋を渡ってたどり着いた島。そこは、あのおじいさんが言ったとおり、何でもある島だった。おいしい食べ物

に、わくわくするまんざい。人々の衣服もおしゃれだ。ネリーは、ここでなら一生楽しく過ごすことができる、とカケロン島のことなど忘れてしまったかのように遊んでくらしした。

そんな日々が何日も続いたある日、あのおじいさんがまた夢に出てきた。

「そろそろ赤い橋が消えてしまおうが、お前はもうここに残るつもりなのか。」

怒っているようにも、悲しんでいるようにも見える表情だった。目が覚めたネリーは、今まで自分が育ってきたカケロン島のことを思い出した。父ちゃん母ちゃんは元気にしているか。島のみんなは、おなかをすかせて動けなくなっているんじゃないのか。みんなの顔が頭からはなれない。ネリーは、自分だけ楽な生活をしていることに心苦しさを感じ、どうするか考えるまでもなく決心した。

「もどらないと。俺は島にもどらないといけないんだ。」

カケロン島に帰る決心をしたネリーは、市場で一つぶの種を買い、それをにぎりしめ、消えかかっている赤い橋を大急ぎで渡った。ネリーがカケロン島に着いたとたん、赤い橋はあと形もなく消えてしまった。島のみんなは、ネリーを温かく迎えてくれ、さらに、ちゃんと食べてい

たか、さびしくなかったか、と心配までしてくれた。みんなの思いがともうれしくもあり、心苦しくもあった。

みんなと別れたネリーは、小高い丘の頂上に向かい、持って帰ってきた一つぶの種を植えた。毎日丘に行き、手入れに汗を流した。ネリーの心が伝わったのか、あつという間にその木には実がなった。タンカンという、オレンジ色に輝くみかんだ。タンカンが実ったとき、カケロン島からオレンジ色の橋が空にのびた。さらに、高台に立つタンカンの木には太陽の光がきらきらと注ぎ、島のみんなや動物たちが集まる、にぎやかな場所になった。するとおどろくことに、オレンジ色の橋のとなりには、黄色の橋が並んだ。

カケロン島が少しずつ活気づいてきたことで、人々の心も豊かになっていき、島中に笑い声が聞こえるようになった。ネリーはうれしかった。あのとき向こう島に残らずに、帰ってきて本当に良かった、と心から思った。

タンカンが豊富に実るようになると、よその島から実を食べに来た鳥がフンを落として行った。そこから出た芽は、立ばな樹木に育ち、緑あふれる山々を作った。島に緑が誕生すると、黄色の橋のとなりには、緑色の橋が空に向かってのびた。山ができると晴れた日が続く、青空の下、畑仕事に汗を流す人であふれた。高く、広

い空。心まで晴れ晴れする青空だ。その青さを映すように、緑色の橋のとなりには、青青とした橋ができた。さらに、島に雨も降るようになった。豊富な水のおかげで、山から流れる川ができ、その川を通して進む水は海へと注がれる。すき通った水が流れこむ海は深さを増し、あい色へと変わる。海面の下では魚やタコがすばしっこく動いている。今度は青色の橋のなりに、あい色の橋ができた。幸せが一つ一つ増えていくことに、島の人たちは毎日感謝した。

ある日、島のみんなはネリーへの感謝の気持ちとして、島中に花の種をまいた。しばらくして咲いたその花は、あわい紫色のすみれだった。小さい花がそよ風にゆれ、どこからか歌声が聴こえてきたとき、あい色の橋のとなりには紫色の橋がのびた。そのとたん、あの赤い橋がくつきり現れ、島中を七色のにじですっぽりと包みこんだ。幸せの七色のにじだ。

七色に囲まれた幸せの島が、ネリヤカナヤ諸島のどこに今もあって、世界中の全てのにじの片方の端は、カケロン島につながっているらしい。いつかさがしに行ってみてね。